

岳参りの起源と歴史

山本秀雄

屋久島に岳参りという行事がある。岳参りとは何をいい、起源・内容・その継承は、現在どんな方法で行われる行事であるかを記してみたい。

一口に「岳参り」と聞かれたら、御岳に祀られている権現結びの神、俗にいう「一品法寿大権現」様に、島の繁昌を聖願し、その成就を感謝する参拝の行事であると答えている。

期日は旧暦四月が祈願、旧暦八月が解願で通常年二回である。漁村にあっては漁期の関係で随時に行われるが、大漁の折は万の祝といい、その魚を供物に岳参りする習慣で昔は頻繁に行われた。万の祝というは鰹魚の場合一船一万匹、鯖も同様であり、飛魚はひと網端（二そう一組）五万～十万の大漁を云ったようである。

御岳は、宮之浦岳・永田岳・栗生岳・黒の御岳の四つをいい。前岳は麓の各集落の頭上に聳える山々で、江戸期の集落数十と考えてよかろう。ほかに奥岳と前岳、前岳と麓の中間の巨岩・巨樹の洞窟、屋久杉伐採事業所、搬出の中継地にも、風化したとはいえ一品法寿大権現の文字を刻んだ碑石が立っていた。聖地への入口・三本杉・花之江河・ウィルソン株・石塚山など、また名もなき峯への路傍にもあって何かを語りかけているようである。昔の岳参りはそれらの碑石にも通過の儀礼を行ったものか、時に古銭を土中に発見したりする。

各集落岳参りコースから考えて、島内に一品法寿大権現の祠碑は、おおよそ五十～六十に達しようか、位置を示す資料がなく、図上に知ることが出来ないのが残念である。

次に岳参りの起源であるが、長享年間（1487～1488）、屋久島に地震が頻発した。鳴動はやまないし、島民は不安と動揺で心の休まることもなかった。領主種子島家第十一代時氏は、折よく種子島に巡錫中の京都本能寺の日増上人（のち「本能寺第七世管長」）に、鳴動を鎮めるための祈禱をお願いした。

日増上人は、早速屋久島に渡り、先ずは御岳を望見出来る永田の顯寿寺に入って、祈禱をつづけ、使僧を三度御岳に送り、法札を納めたが、鳴動はいっこうにおさまらなかつた。容易ならぬとみた日増上人は、みずから永田岳に登り、笠石という巨大な岩石の洞穴に七日間おこもりをして、鎮災の法華経を誦し、法札を御岳の山頂に納めた。

「熊毛郡宗教史資料」によると、その時から鳴動はやみ、屋久島は今に至るまで鳴動、怪異がないということになっている。かくて聖願の題目、一品法寿大権現の文字は、板碑から石碑に刻まれて、後年次々と山々に勧請されたのである。

南島で唯一延喜式に載る益救神社は、古来須久比神の別称を持つ神で、南島の神社を支配していた。その由緒によって、後一条天皇の御宇（1016～1035）に一品の神階を授けられたといわれ、御岳をご神体に巨樹を尊崇する！！霊山神木！！不伐の思想が芽生え、日増上人の永田岳のお籠り、法札の建立が更に山岳信仰を深く根付かせたことが理解されようか…。

しかし、岳参り起源に異説がないわけではなく、一説に文安年1444～永正年1517のころ、楠川に本拠をおいて御岳に修行する、紀州熊野の山伏たちがあつた。岳参りもこの修行僧たちに導かれたのではないかとの説もあるが、確かな資料を見ないので、今はその説をとらない。山伏たちの中に採葉・採鉞という別目的のグループがあつた。岳参りと軽々と結びつけることは

出来ない。

行事の内容

岳参りコースについては近年安房林道が自動車道に整備されたことで、中腹まで安直に車を利用して、自由にコースも変更されている。その事が行事にも現われて、すべてに省略化がはじまっている。大事なみそぎ、奥岳のお籠りも古風は消えつつある。また、過疎と高齢化がすすんで、回数も年二回が一回に、最も関係の深い前岳参拝も疎かになっている。

昔、参(山)道は麓から御岳(奥宮)に向って、直線的に登るコースになっていた。が前述するように、麓と御岳の間には通過の儀礼を欠かせない多くの碑石があった。いま楠川集落の例を引いて詳しく記すと、

- 1 正木まさき (村落と麓の境目で、サカムカエをする場所)
- 2 野の分わけ (麓と森=聖地への入口)
- 3 三本杉 (葉山といわれるところで、前岳の見える場所、また前岳と奥岳のコースの分岐点)
- 4 前岳 (本道からははずれる、標高1125メートル)
- 5 小杉谷 (屋久杉伐採地拠点=集材地)
- 6 石塚山 (楠川・榊川両集落の最終参拝地である。標高1589メートル、奥岳というに変わらないし、島内第一の岩穴がある。)

次に江戸時代の集落十七村(旧村数)の御岳とよぶ参拝地を記せば、

永田…永田岳(実施されるが明治末期頃から登山方式が採用されている。従って大勢で登ることが多い。)

吉田…吉田岳(旧法寿の碑は埋められ、別名の碑石が建つ。)

一湊…一湊岳(明治の宗派問題が山の神法寿権現様にも飛び火したのか、岳参りの行事は消滅している。)

志戸子…志戸子岳(現在中止)

宮之浦…御岳(現在中止)

楠川…石塚山(楠川前岳にも登る)

榊川…石塚山(楠川前岳にも登る)

小瀬田…愛子岳(実施)

船行…明星岳(年一回九月実施)

尾立岳にも参拝することがある。

安房…御岳(年一回九月実施)

麦生…御岳(春秋二回実施)

原…本富岳(年一回九月実施)

尾之間…御岳(年一回九月実施)

小島…御岳(現在中止)

平内…破沙岳(年一回九月実施)

湯泊…御岳(年一回九月、七五岳にも)

中間…御岳(年一回十月に実施)

栗生…御岳(年一回九月に実施)

以上旧十七集落について触れたが、十四ヶ村は継続し、四ヶ村は中止している。新しく戦後開拓村が生まれ、いま新村は発展を遂げているが、新村は昔、島民の足枷あしかせとなっていた平木上納制、山中生活を知らず、岳参りとも無縁であったことから、行事には馴染めないばかりか、参入も遠慮したむきがある。

中に明治期の初め、藩政の延長線上に屋久杉を必要とした県当局の事業があった。(西南の戦役で事業は失敗したが、残留組による新村が生まれ、独自の山の信仰のあったこと、またタングステン鉱山という全く新しいタイプの企業による新しい神信仰の種子が落とされてたかに聞くが、発芽はしていない。岳参りにつながる神でなかったことは云うまでもない。

旧十四ヶ村の中で、今に古風を伝えている楠川村の岳参り行事を紹介すれば…。

行事は年二回 旧暦の四月と九月の好日に、仕来たりに従い、村役人立合いで、代表者四名が選ばれる。集落中の最も元気者である。主役は二名が奥岳に、二名は前岳組である。

当日は代表者の出発時、村役人と村人の特別に岳の神に願いごとをする方々が、里宮楠川神社の前に揃って見送ることになっている。

奥岳の組は、その夜、石塚山の洞穴前にお籠りをする。翌朝祭事を済ませて下山する。

一方後発の前岳組は、先発組の下山の日の早朝に里宮を発って前岳に登る。祭事は両組に変わることはない。ころ合いを見計らって下山するが、かねて約束の時に三本杉という地点で合流して、一緒に帰るならわしである。

サカムカエは、正木まさきという場所が当てられるが、代表者の労をねぎろう場所で、出発の見送時の人たちに、長老を加えて取り行われるが、料理は各自持参である。屋久杉製の弁当箱、各家伝来の自慢の品に自慢の料理が披露されて、正面には代表者をすえて、参拝の報告があり、次回の反省点の吟味があって、酒宴となる。賑やかに木挽歌も飛び出す。

服装は今は登山服であるが、昔は尻ばしよりのモモヒキ、脚半に山わらじ(アシナカという)をはいた。

出発の前夜、代表者が村の本蓮寺という氏寺にこもって、けがれ、雑念を払う儀式を行い、当日早朝、里宮の鳥居の前浜(海水)にみそぎする。お供物は、洗米・酒・塩・海藻(ホンダワラ)・白砂(竹筒に入れる)・賽銭をたずさえて出発する。途中の詣所(碑石の立つところ)は通過の儀礼として、必ず賽銭を上げる。

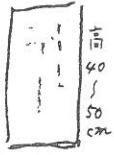
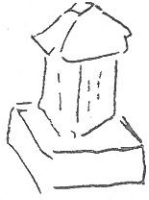
前岳は石塚山の本尊に変わらないお供え物をする。荒天に遭えば引き返すが、最寄りの詣所を仮の奥宮となし、祭事を斉行して下山するのである。

ところで、岳参りの対象である「一品法寿大権現様」の碑石の形状であるが、供養塔式であったり、墓石型であったりする。近代のものは竿石だけの墓石型が多い。

竿石の高さ40~50cmぐらい、幅は18~20cmの角物、それに四角50~60cm×15cm幅の台座がついている。中に屋根つきぼうぎょうといつか宝形造り、また宝篋造りぼうきょうも見られたが、風化が進み、半壊の姿を横にしている。

石材は安山岩という火山岩(色は灰・黒色)であったり、山川石という水成岩(黄色)であったりする。

建立年は江戸中期以前にさかのぼるものは、文字の判読が出来ない。中に宝珠をつけたものもあったと聞く。不思議なのは花崗岩の島といいながら、石質が弱いのか、地元の石が用いられていないこと。石敢當や恵比須様には自然石も見られるというのにである。



中18~20cm程度



また一品法寿大権現の文字、法寿については上代はすべて法寿を刻み、江戸期も元禄年以降に、宝寿・宝珠が使用されるは如何な理由によるか、研究の余地がありそうである。

なおまた、麓に近い詣所には、疱瘡の神や、眼・齒など諸神も同居されていることで、藩政期の余儀ない山中生活の中に生まれた、島民の健康管理の姿を写すかのように風俗が残っている。

岳参り行事は、島の精神文化を支えてきた大きな要素といえるが、一方島民と森のかかわりを形にして見せてはくれてはいないか。

先きの屋久島世界自然遺産登録も、また各種の保護指定も、その背景にはこれらの存在が大きく物を云っているからで、島人の心の中に古来、森は「先祖の霊」が宿るところとして、「岳の神」に祖霊を重ね、御岳を崇拜する思想を生み、長期に及ぶ岳参りの盛行があったとの感を深くする。

確かに江戸期の藩命は「不伐」の形態を崩したとはいえ、「海供養」「山供養」としての、岳参りの伝統を失わせるものではない。

一部に奥宮・前宮・里宮・詣所等と云う呼称に、また奥岳・前岳・里山というとらえ方に、参拝の期日・位置・コースにも今昔変化が見られる。歴史と生活の有ようによろうが、その日程にしても御岳は二泊三日（集落によっては二日）、それには山頂にお籠りする行の時間が入っている。前岳は日帰りの一日である。

なお面白いと思うのは、岳参りの道程を「登りは八里・下りは五里」とする諺があること、屋久島には古来人口を口六万（猿二万・鹿二万・人二万）といい、多雨を（月三十五日雨）というごとく、八里五里の諺の中には楠川の岳参りコースに示すように、通過儀礼の必要な碑が四〜五ヶ所あって、その時間を里程に表したものということが出来る。

次に変わった岳参りの例を紹介するが、

「浜下り」という行事のことで、先に述べた「万の祝」が大漁感謝であるのに対して、「浜下り」は俗に飛魚招きのことと云われるが、実は豊漁祈願で旧六月三日に漁村で行われていた。四月・八月の岳参り同様、選ばれた若者は御岳に登る。供物の外に大漁旗を持ち、神の霊を込めて持ち帰るが真っすぐ「浜下り」の場所に届けられる。飛魚招きする女性の手に渡され、魚を招く神事が5〜6名の女性によって行われるという仕組み。忌中の人をのぞいたことは云うまでもない。この日は漁村（永田など）に於いては、村人一体に休養慰労の日として、青年たちによる芝居狂言が盛大に執り行なわれ、舞台は村人の尊崇する御岳・前岳の見える前浜に、岳に向けて作られたという。「屋久島記」にも興業の様子が面白く記されている。

今はかつての魚を集めた魚付林が消える。御岳の森からも精気が失われる登山の有よう、山の神事の継承は自然環境を守る上からも転換期を迎えているのかも知れない。